

(文字起し)

ヨハネス・ハーノ記者（ドイツ第2テレビ東アジア総局長）にNHK記者がインタビュー

Q どこに関心を持って取材をしているか？

ハーノ記者：私がドイツに帰ると日本人はどのように原発の危機を乗り切るのかとよく聞かれます。やはりドイツでは日本の原発事故への対応に関心が集まっているのです。必要なのは危険性をきちんと伝えることだと思います。日本政府や東京電力は危険性を管理できていると言っていますが、それは正しくありませんし、間違っていると思います。福島原発、特に四号炉が事故を起こしたら、もう日本だけではなく、全世界の問題になるのです。

Q 日本の原発事故のどこに注目？

ハーノ記者：日本には原子力村という言葉がありますが、これは独特ですね。ドイツでは規制を行う当局は単独で存在します。例えば、原子力監査局、これは経済省とは関係のない独立した機関です。そこの科学者達は厳しい視点で原子力エネルギーを批判しますが、当然のことで、それでキャリアを失ったりしません。

日本では政界、学会、エネルギー業界、そしてメディアが深く結びついている印象です。

Q ドイツでは日本の放射能汚染の不安は？

ハーノ記者：視聴者の方から、例えば、『私の子供が今、日本にいますが本当に大丈夫でしょうか』と聞かれます。そこで私はこう答えるようにしています。「全く問題ありません。日本で暮らしても大丈夫。私も日本で住むのは大好きです。皆、大袈裟です。今の日本は大丈夫。でも、危険性も常にあることは、しっかりと認識すべきです」

Q 震災直後に賞賛された日本人のイメージに変化は？

ハーノ記者：変わりません。ただ、一年前とは大きく印象が変わったこともあります。多くの被災地に行きましたが、被災者はもう政府を信頼していません。電力会社も信頼していません。メディアも信頼していません。置き去りにされたと感じています。被災者同士で助け合い、支え合っていますが、国のエリート達に見捨てられたと思っています。それが以前と印象が変わった点です。この国のエリート達はもう何もしてくれないんだと。それが私の印象です。

Q 日本の政府や東電・メディアにひとこと

ハーノ記者：重要なのは誠実さです。今回の災害は四つです。地震、津波、原発事故、そして信頼の喪失の四つです。もし政府や電力会社が誠意を持っているのなら日本のためになることしかししてはいけません。もし彼らが国民の信頼を取り戻したいなら、全て包み隠さずに究明するべきです。

日本のジャーナリストやメディアは優れていますが、報道の自由を最大限生かしていないと思います。ジャーナリストは、政府の代弁者ではありません。私たちメディアの使命は、何が真実で何が真実でないかを見出して、人々に伝えることでなければなりません。私たちは国民の代弁者なのです。ですから日本のメディアには、自分の持つ可能性を有効に活用して欲しいと言いたいです。それは日本だけではなく、ドイツのメディアにも言えることです。いえ全世界のメディアにも言えることなのです。

<http://chiko123.blog.fc2.com/blog-entry-485.html>